

# 黙って食って帰れ

林 なおと

小学三年生の時のことだった。親戚の家で昼食に出されたある食べ物、僕の心を鷲掴みにした。

その食べ物は生肉のようであって生肉ではない。ハムのものであってハムではない。

「オカン。これ何？」

「どれや?」

「これや。これ」

オカンは僕の指さす先を見ると、少し呆れたように

「なんやそれかいな。ベーコンやんか」

「べ、ベーコン」

なんて異国感漂う名前なんやろう。そして僕はそれを口に運んだ。

美味い!

味わったことのない味だった。ジューシーでありながら香ばしい。見た目、名前、味、それらすべてが僕を虜にした。

「なおとは食べたことなかったけ? ほなら今度うちでもベーコン買つといたるわ」

「ホンマ? 約束やで!」

「まかしとき!」

その日僕とオカンは固い契りを交わし、親戚の家を後にした。

固い契りを交わしてから何日たったんだらう。その日は土曜日のため、授業は午前中までだった。

家に帰るとリビングでオカンが寝転びながら、当時関西で人気を博していた番

『ノックは無用』を見ているという、いつもの土曜日の光景が広がっていた。

「ただいま」

「おかえり。冷蔵庫見てみ」

オカンは顔だけ僕にむけ、冷蔵庫にもかって顎をしゃくった。

僕は直感した。

ベーコンや

僕は冷蔵庫へ駆けつけた。扉を開けると、スーパーの袋にくるまれた物体が眼に飛び込んできた。

僕はつい強引に袋を破ってしまった。

やはり念願のベーコンだった。

「今日の晩ゴハンや。食べたいゆうてたやろ」

「ゆうてた。オカン忘れてなかったんや」

「あたりまえやんか。お母さん嘘ゆうたことあるか」

ある。いっぱいある。でもつつこむのはやめておいた。

「今から前野さんちで学芸会の準備があるけど、終わったらスグ帰ってくるな」

「氣いつけて行っておいでや。今日の林家はベーコン祭りやで」

僕は食卓のほとんど焦げた醤油の味しかない焼きめしをかつこみ、家を飛び出した。

前野さんの家には、早くも僕以外のメンバー全員がそろっていた。

「林君遅いわ。時間厳守言うてたやろ」

班長の井上さんが口を窄めた。

井上さんの威圧的なところは、見た目だけではない。

「まあそう言わんと、全員そろったんやから早よはじめようや」

前野さんが少し困ったような笑顔を浮かべ井上さんをなだめた。クラスの男子に前野ファンが多いのには頷ける。

そんなこんなで僕、前野さん、井上さんとバキューム藪内の学芸会の準備はスタートを切った。

ちなみに、バキューム藪内のあだ名の由来は、どこの学校にもひとりはいた、クレパスや絵の具などの文具関係をスグ口に運んでしまうところから来ている。

「もう少ししかかりそう?」

前野さんのオバさんが部屋をのぞきに来た

ことを機に、僕らは準備を切り上げた。

前野さんは、僕らのことを一人一人オバサンに紹介してくれた。

僕の順番が回ってきた時、オバサンの顔がパツと明るくなった。

「絵の上手い林君やんね。宏美から聞いてるわ。今度オバさんにもぜひ見せてね」

僕は嬉しかった。オバさんが僕のことをおぼえてくれたことに、そして前野さんが家で僕の話をしてしてくれていることに。

だが、学芸会の話や学校の話などたわいない会話をひとしきりした後、オバさんの口から衝撃的なひとことが放たれてしまった。

「今日は遅くまでご苦勞様。みんなお腹へってない?オバさん、カレー作ったから食べて帰ってちょうだい」

喜ぶ井上さんとバキュームを尻目に僕は愕然としてしまった。

食って帰るわけないやん。だって今日僕んちベーコンやで

僕の口は大急ぎで動いていた。

「オバさんすみマセン。今日僕んちベーコンなんで帰ります」

「エッ?」

その時のオバさんの顔。さっき僕に笑いかけてくれた顔はガラリとかわり、何か不思議なものを見るような顔になっていた。

僕は少しだけ悲しくなってしまった。

「そんなこと言わんと、食べて帰ってちょうだい。オバさんのチキンカレー評判いいんよ」

「そうや、食って帰れや。ベーコンなんかよりチキンカレーのほうが美味しいぞ」  
クレパスを美味しいと言ってる奴にだけは言われたくない。

「食べて帰ってよ。お母さんのカレー美味しいんやで」

「ベーコンなんかいつでも食べれるやん。カレー食べて帰рийや」

方々から矢継ぎ早に言われてしまい、苛立ちとともに泣き出してしまいたくなくなった。

ベーコンなんかいつでも食べれる

ホンマその通りや。明日でも食べれる。でもお前らはわかっていない。僕がこの日をどれほど待ち焦がれていたかを。

今日はベーコンしか食いたくないんや！

「やっぱベーコンなんで帰ります」

僕の声は少しうわずっていた。

「じゃあ、こうしよつか。オバさんからお母さんに電話してあげる。そうしたら林君叱られないでしょ」

オバさんはわかかっていない。オカンに叱られるから帰りたいたいんやなくて、ベーコンが食べたいから帰りたいたいんや。

電話をかけるオバさんの横で僕は少しふて腐れていた。

「もしもし林君のお母さんですか。はじめまして前野宏美の母です」

オバさんには悪いけどオカンも帰らせてくださいってゆうわ。なぜか僕には確信めいたものがあつた。

「お母さんがかわってほしいって」

僕はオバさんから受話器を受けとつた。

「オカン？なんか前野さんのオバさんがな・・・」

と、僕が話しはじめたのと同時に強烈な怒声が飛び込んできた。

「アホタレ！林家の恥さらしやがって！ホンマお母さん恥かしくてしゃあないわ！黙ってカレー食って帰れ！」

一方的に電話は切れてしまった。

「お母さんどう言うてはった？」

オバさんは少しだけ勝ち誇ったような顔をしていた。

「スママセン。カレー食べさせて下さい」

オバさんの特製カレーは鶏肉がふんだんに入った豪華なものだった。ただ後にも先にもこの日のカレーほど味のしないものはなかった。

余談になるが、先日実家に帰りオカンにこの話をしたところ

「お母さんそんなことゆうたか？なおとの勘違いちゃうか」

と、とぼけたことを言い出した。

「ゆうた。ゆうた。俺けっこうビビッたんやで」  
必死に食いさがる僕に

「思い出した！それ名古屋の幸枝オバさんの話やわ。小さい頃、私がゆうた話ごっこ  
ちゃになってるんやわ」

「幸枝オバさん？」

「そやわ、そやわ。間違いないわ。お母さん嘘ゆうたことあるか」

「ある！」

三十年以上の時を経て、僕はオカンにつっこんだ。